

海を見ないで陸を見よう
梶 龍 雄



講談社

海を見ないで陸を見よう 定価八五〇円

第1刷発行 昭和53年5月20日

著者 梶 龍雄

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社



〒112 東京都文京区音羽 2-12-21
電話 東京(03)945-1111 (大代表)
振替 東京8-3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

落丁本・乱丁本はお取り替えます。

© 1978 TATSUO KAJI Printed in Japan

目次

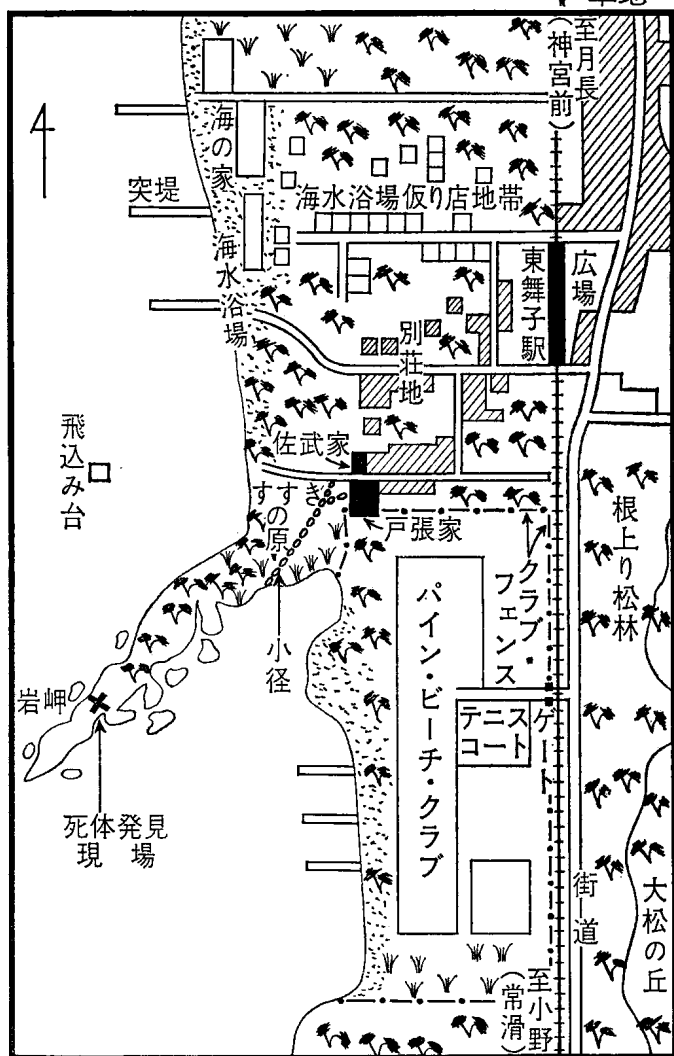
第一章	冬を越す蝶	5
第二章	狩をする蜂	44
第三章	蟻の館	102
第四章	蠅螂の系譜	155
終章	拏蝶の飛ぶ頃	199
あとがき		236

装帧／井上正篤

海を見ないで陸を見よう

東 舞 子 概 略 図

砂浜
 松林
 草地



第一章 冬を越す蝶

1

きらめく海で津枝子は死んだ。

高志はそう思おうとした。そう思わなければたまらなかつた。津枝子が海で溺れ死んだなどという、低俗な表現で考えることは、彼女に対する冒瀆だつたからだ。

高志は水死体が発見されたという騒ぎを聞いた時、海にいた。だが、それが津枝子であるとは、まったく気づかなかつた。海水浴客の一人が、また溺死したのかという意識しかなかつた。高志はこれまでに、同じようなことを、もう何度となく、この海岸で経験しているのだ。

彼はその時、砂上にあおむいて目をつむり、浜に碎ける波音のリズムをさぐっていた。それは幼年時代から変わら

ぬ、この浜での高志のひそかな遊びだつた。目をつむつたまま、次に碎ける大きな波の時期を予測するのだ。

一度、波が大きく碎けたあとは、中くらいの寄せ返しが一つある。あとは小さい波がいくつか続く。その間に中程度のものが、碎けることも少なからずある。そしてついに、またひととき大きな波が押し寄せる。

「こんどは大波だ！ 絶対だ！」

頭の中で叫ぶ。的中率は必ずしも高くない。もうしわけのような音しかたてない小波もある。大波と判定するには、第三者のもう一人の自分が許さないものもある……。

気まぐれな自然の中から、規則を発見しようとするこの遊びに、高志はいつも他愛なく熱中した。裸の腹や背に痛いくらいに降り注ぐ陽射し、波音のむこうに聞こえる海水浴客のざわめき、ときどき空に突き抜ける子供や女のかん高い声を、視覚を閉ざした世界の中で享受しながら……。

とつぜん、そのざわめきが、妙に歪んで揺れ始めた。太い呼び声や、大声の話しかけが耳にきわだってひびいた。この異変に、高志は上半身をたてて起きあがると、ゆっくりと目を開いた。それでも夏の陽のまばゆさに、瞬時世界は白くくらんで、何も見えなかつた。

光にわずかに馴れた目が最初に見たものは、海にいる者も、浜にいる者も、ほとんどが左手の岩岬の方を眺めてい

ることだった。次に気づいたのは、いつもやや沖合に漂泊している監視用の漁船が、岬の突端にむかつていそいでいることだった。それなりの精いっぱい速度である。鱧に立つ漕ぎ手の姿が、体をはげしく前後に動かして、櫓をあやつっている。

今はもう真夏の海の輝きに、目もすっかりなじんでいた。その目が飛込み台を少しはなれた波間を、一つの頭が岬にむかつて進んで行くのを捕えた。

高志は飛込み台の上に視線を走らせた。沖合百二、三十メートルばかりの所に、木材で櫓状に組まれたものである。

上には三つの人影があった。つい前までは四つあったはずである。とすれば、その波間を進む頭は、桜井にちがいない。そのようにみごとな抜手とスピードで泳げる者は、飛込み台の上では、彼以外にないはずだからだ……。

「土左衛門らしいわ……」

「岬のむこうにうちあがったというがな」

はやくもどこかで情報を耳に入れたらしい若者が二人、名古屋弁の会話を交わし、高志の横を小走りに波打ちぎわにむかつて行った。そこに行っても、特別何かが見えるというわけでもないのに……。

そんな言葉を耳に入れなくとも、高志はどうやら水死人

が出たらしいことはすでにけんとうがついていた。三、四歳の頃から、夏になればこの東舞子の海水浴場に来ているのだ。その間に、こんな状況には何度も出あつていたのである。

水死体が船から浜へとあげられるようすも、一度ならず見た。白くふやけた足を薦の下から突き出しているようすを、ごくろうにも見物に行ったこともある……。

だから高志は溺死者が出たことよりも、むしろ桜井の泳ぎぶりの方に興味を持った。どうやら水死体のあがつた所まで泳いで行こうとしているらしいのだ。強引で、何事にも割り込みたがる桜井らしい。

あのバカ、ほんとうに泳ぎきるつもりかい？

高志は胸の中でつぶやいた。

飛込み台から岬のむこうがわまでは、長い距離である。しかも岬の突端は、かなりの強い潮が流れているという。

岬の周囲は岩礁が多くて、とりつきにくくもある……。

桜井の頭と監視用漁船とは、見る見る距離をあけて行った。やがて船は岬の突端のうしろに隠れる。

じつさいのところ、海水浴客の大半が、何があつたのか知らなかったにちがいない。何かがおこつただけが伝播されて、皆と同じように岬の方を見ていたにすぎないのだ。

だから何も見えず、何も感じられないと知った時、彼等はただちに目の前の享樂へとかえっていた。海水浴場はもとの活発な音と動きにみたされ始めた。

高志はそこで、きらめく波の中の桜井の頭を、なおも觀察し続けていた。

桜井はしばらくはまだ泳ぎ続けた。抜手を切る腕の小さい色が、規則正しく波間に見え隠れする。

だがそれも少しの間のことだった。抜手の腕が見えなくなり、わずかながら認められていた頭の前進もとまった。立泳ぎになったらしい。

やがて前よりはずつと遅いリズムで抜手の腕が動き始め、頭は飛込み台の方へと、ゆつくりともどり始めた。

高志は立ちあがった。飛込み台のグループに加わろうと思つたのだ。だがその決意は、波打ちぎわに行く前に、萎えてしまつてゐた。飛込み台までの百二、三十メートルの距離を泳ぎきる自信を、彼は今もって、持つていなかったのだ。というより、度胸を持つていなかったというほうが、正しいかも知れない。

だから高志が飛込み台上の人となるのは、もっぱら千潮時前後をねらつてのことだった。この時だと、飛込み台までの距離は百メートルそこそこになる。しかも多くの海水浴場と同じように、ここも遠浅だったから、その間の半分

くらいの距離は、背がとどく水深だったのである。

しかし今はほぼ満潮時である。距離の四分の一も行けば、もう足が底につかなくなる。その時の空虚の感覚は、軽い恐怖を呼びおこす。心臓の鼓動をはやくさせる。その上、満潮時にはそのあたりから、急に水が冷たくなる。心臓麻痺で溺死というのは、おそらくこんな要素の重なりからではないか……。そう考えるとただでさえはげしい水泳運動に高まつている胸の鼓動は、ますます大きくなるように感じる。事実、一度、途中で足首をひきつらせ、恐怖と狼狽の塊りとなつて、岸边に泳ぎ帰ったこともあるのだ……。

高志は辟ける波に足を洗わせながら、沖の飛込み台をもう一度眺めて思つた。

第一、飛込み台の仲間の所に行つたところで、水死人について新しい情報をえられるはずもないのだ。それどころか、広い海の中に孤立した飛込み台上では、海岸の間隔よりもっと情報不足であるにちがいない。

今、飛込み台のすぐ近くにもどつつつある桜井にしたところで、けっきよくは監視用の船を追いかけてみたというにすぎない。引き返した地点からでは、岩岬のむこうはまるで見えないのだ。何の話も持つて帰れないことは確かである……。

高志は胸のあたりに水面が来る深さまで行くと、海岸線

にそって平行に平泳ぎを始めた。泳ぎながら、もう十分もしたら帰ろうと思った。

このところ毎日の習慣のように、今の時間になると、ころよい空腹を感じる。そして伯母の家に帰ると、バターをたっぷりぬったふかしじゃがいもと、舌にとろけるようなうまさの進駐軍のコンビーフが待っているはずだ……。

高志はしあわせな健康感に酔って、もつと腹をすかせようと、平泳ぎのストロークに力を入れた。

この時になっても、高志は水死体と津枝子のことを、まったく結びつけもしなかった。土左衛門という言葉のまわりつく水死体。それとあのおうように生き生きとした津枝子の姿が、結びつくはずもなかったのだ。

あとから考えれば、それは神経質な高志らしくないうかつさだった。彼はいつものように、海に出て行く津枝子の姿を見て、追うようにして浜に出て来たのである。しかし海岸に、彼女の姿は見つからなかった。

海水浴場はかなりの混雑だったとはいえ、当時は……昭和二十三年当時は、まだ狂気のラッシュというような状態はあまりなかった。せいぜい五、六百人前後の人出というところだったろうか……。そこから彼女の姿をさがし出すことは、決してむずかしいことではなかった。

しかも彼女はバステル・カラーの明かるいブルーの水着

だった。アメリカ製だというその水着を、津枝子自身は人目につきすぎると、あまり好んでいなかった。だが高志が津枝子を見つけ出すにはいい目じるしとなっていた。

そのブルーが、浜に立つて数分の間見まわしてみても、どこにもなかったのである。

そういうことが、これまでに一度もなかったら、高志ももう少し疑いを持ったかも知れない。だがこれまでも二度ほど、同じようなことがあったのだ。

一度は津枝子が浜に出るとすぐ、久しぶりの女友だちにあった時だった。彼女はその友人と、すぐ近くの海の家に入り、すっかり話しこんでしまったという。

二度目は、津枝子が陽射しのふりそぐ浜に出たと同時に、頭にくらみをおぼえた時だった。彼女は不安になり、日陰の松林を抜けるまわり道をとって、そのまますぐに家に帰ってしまったという。

あとで津枝子はその行き違いを、高志にもうしわけなきようにわびた。ほんとうは彼女はわびることはなかったのだ。津枝子が海に出て行くと、高志もあとを追って泳ぎに出るといいうのは、暗黙のうちにできた習慣にすぎなかったのである。

だから高志はその日も、津枝子の姿が見えないことは、前の二度と似たような理由だと思った。そのまますぐに海

からもどって、津枝子の家をたずねてみようかとも思った。だがそれはあまりにあらわな行動のようで、ためらわれた。

高志は津枝子の行方に心を残しながらも、海に入った。

そして泳いだ。浜にあがつて甲羅干しをした。また海に入つて泳いだ。二度目に浜にあがつて、波の音を聞く頃には、高志はもうすっかり津枝子のことは忘れていた。

あとからその時の自分の心理を思うと、うしろめたいきもちになる。津枝子への心のたりなさを、自分自身で疑いたくなる。愛というものを、ほんとうにはまだ知らないのではないかという自己嫌悪におちいる。何事につけ、十九というはんばな歳の自分の行動や心をなさけなく思うこの頃だ。

高志は最後のひと泳ぎをすますと、松林の縁ぞいに走る道を抜けて、伯母の別荘にもどった。

裸の足の裏に、砂が熱い。走らなければ、たえられるものではなかった。しかしそれも土が固くなると、ようやくらしくなる。高志は走るのをやめた。

その時にいたつても、彼の念頭には津枝子のことはなかった。あるものは恥ずかしいことながら、待っているであらう、皿に盛られたじゃがいもだけだった。

海岸から伯母の家までは、三百メートルと少しばかりの

距離だった。歩いて三、四分の所である。

津枝子の家は、伯母の別荘と道をはさんで、ほぼ前にある。海岸よりの一面のススキの原の中に、敷地がやや突き出ている。

その前を通り過ぎた時、高志は津枝子の家の横手の裏庭で、複数の人影が動くのをちらりと見た。昼間はいつも静かな家である。珍しいことといえた。

にもかかわらず、やはり高志は何の不審も持たなかった。

彼は伯母の別荘の黒塗りの門の間を抜け、素足の裏に落松葉の痛いのをがまんしながら、横手のつるべ井戸にまわつた。古くからあるこの井戸で、海からあがつて来た者は、まず体の砂を落すのが習慣だったのである。

津枝子の死を、伯母にしらされたのはここであった。

待っていたように台所口から走り出て来た伯母は、かなり支離滅裂に、津枝子の死をしらせ始めた。

「さっき、美穂子さんが飛んで行って……ここにちょうどいらして……津枝子さんが溺れたんですよ……でも警官の人がここに来た時には何のことかよくわからなくて……」このとびとびの展開も、綴りあわせれば次のようなことになった。

岩岬の岩の間の潮タイドプールだまりに、津枝子の溺死体があつたこ

と、発見したのはバイン・ビーチ・クラブのオンリーの女だったこと、たまたま津枝子の姉の美穂子は発見のしらせが来た時伯母の家にいたこと、そこで美穂子はあわてて現場にとんで行ったこと、つい先刻死体が家にはこびこまれたこと……。

いい終ってから、もともと感情にもろい伯母ははげしく震え始めた。震えをおさえようとすればするほど、小さきみにはやく震えるというようすだった。

それにくらべれば、高志は驚くほど冷静だったといえる。自分でもふしぎなくらいだった。すでに高志は、人間にはどんなことでもおこりうることを知っていたからだろうか？

しかし……しかし、それでも高志の認識の中では、それが津枝子にだけはおこるはずがなかったのだ。考えたこともなかった。

だが今は、その死を受け入れねばならない……。

若者の心は清潔にむこうみずである。高志は死に對して、はげしい憤怒を感じ始めた。突如として、しかも厳然として、津枝子に見舞った不法な死に對して……。

すべてはそいつのために、音をたてて崩れ去ってしまったのだ。このひと夏に高志が賭けた夢は、不安と悩みにいろどられながらも、それだけに屈折のあるバラ色だったの

に……。

やがて高志は伯母とはちがった、体の震えを、おさえようもなくなっていた。

2

高志がこの東舞子の海に来たのは、八年ぶりだった。その空白には、戦争が横たわっている。

駅におりたつた高志の胸は、旅情にときめいた。東京から名古屋まで準急列車で七時間余。それから電鉄で五十分以上の長い時間をかけての道のりは、旅に来たという感慨をいだかせるにじゅうぶんだったのだ。

それでもこれで、交通事情はよくなったほうなのである。つい一年ばかり前には、東海道線の急行は全廃、長距離列車は一日に二本という、最低の時もあったのである。

嬉しい旅情に包まれながら、駅の内外を見た高志は、いっそう嬉しいものを見つけた。風景は……自然も、建物も、少年時代の記憶のころとほとんど同じだったのだ。

駅の建物も少しも変わらなかった。大正の末に、電鉄会社が海水浴場と避寒地を兼ねる別荘地として、開発しようとしたのが東舞子である。

そのため駅舎も当時としては、精いっぱい、しゃれたコッテージふうに建てられていた。駅前の広場には、モル

タル作りの洋館建ての土産物店や、天井を藤棚にしたキオスク風の休憩所が散らばっていた。そのすべてが、戦禍をまるで知らなかったように生き残っていた。

高志は改札口でいったんおろした小型トランクをとりあげると、はずむ足どりで、果敢に照りつける、西に傾むいた夏の陽射しの中へと歩み出た。今年の夏に輝やかしい希望を持ってそんな気がしながら……。

駅前の広場から左右にのびる街道を右へまがると、五、六軒の小さな店が並んでいる。八百屋、魚屋、雑貨屋……。高志はそういつた店が、八年前にもあったことを、今は鮮明に思い出していた。

どの店も軒が低く、間口が狭く、板壁は風雨にいたみ、多かれ少なかれ傾むいている。貧しげなその老朽もまた八年前と同じだった。どうやらその頃から、この小さな店のたたずまいは、老朽を停止してしまったのかも知れない。ともかくここでは何も変わっていないのだ……。

それと比べると、高志がけさ早くあとにして来た東京と来たら、すべてが変わってしまっていた。おい茂る雑草の中に、こわれたコンクリートや石塀がめだつ焼け跡、壁に無惨なこげあとを残したビル、喧噪にみちたバラック集団の駅前闇市……。昔の東京はあまりない。

そして高志はそれが悪夢であることに、あまり気づいて

いなかった。小学生時代から戦争の中で育った彼には、戦争が普通の生活であつたためかも知れない。

それに悪夢の中にいるうちは、それは悪夢ではないのだ。さめてからそれとわかるのだ。

だが、高志もいまようやく、それが悪夢であることに気づき始めていた。すべてのものは、ほんのゆっくりしか変わらないことのほうが、あたりまえなのだ……。

高志は魚屋の前を通りすぎながら、たてかけられたよしの間から、中を一瞥した。

たたきにうたれた水のおいが微かにただよう店の中は、がらんとしていた。それでも店には、何種類かの魚が何ということもなく並べてあつた。一番端の箱には、クルマエビさえ！ 東京では見られない光景である。

一軒置いた八百屋の店には、ウリ類の青いにおいがただよっていた。店先に置かれ、苛烈な夏の陽を浴びているスイカやマクワウリからだつた。もしこれが東京の露天市などに置かれたら、どんな値段でも、たちまちのうちに売られるところだろう。

高志は食べ物に対して、伯母の手紙どおりの期待を持っていたらしいと知った。

終戦後の二年から比べれば、三年目のこの頃は、ようやく食糧事情も上むきになったとはいえる。だが主食の遅配

は続いていた。かわりに配給される占領軍放出のキューバ糖は、カルメ焼きにして食べても、甘いばかりで腹のたしにはならない。おまけに高志は大学予科三年の食べ盛りときている。

そんな高志を誘惑するような、伯母からの手紙が最初に来たのは、六月の半ばのことである。今年の夏休みは東舞子で海水浴がてらすごさないか、東京からくらべれば食糧事情もいいから、きつと高志さんも満足するだろうというのだ。

伯母と伯父とは、もともとは名古屋市内の、豪壮といつていい邸宅に住んでいた。東舞子にあるのは別荘だった。それが昭和二十年五月十四日の大空襲で焼け出されてから、そこに移り住んだのである。

その手紙にはこうも書かれてあった。

東舞子で一番大きい旅館だった東舞館は、いまは進駐軍に接収されて、バイン・ビーチ・クラブという名になっている。伯母の別荘の前にあった戸張さんの邸も、一部をこのクラブに貸す形で将校用のサロンになっている。そして戸張さんの上のお嬢さんは邸に住んだまま、ハウスキーパーの役もしている。そんな関係から、米軍物資もずいぶんわけてもらえるという、誘惑的な話だった。

高志は大いに心をそそられた。

だが彼はアルバイトの家庭教師を、二件持っていた。しかも、その収入の大半を学資にまわさなければいけない状態だった。一ヶ月の無収入はいたい……。

二度目の手紙はそれから二週間ばかりして来た。

今度は高志が来るのは、まるできまつたことであるように書かれていた。高志はそこに伯母の執心めいたものを感じ始めた。

それには海水浴場も去年あたりから人出が多くなり、今年からは電鉄の遊戯施設や休憩所、さまざまの店もできて、ずいぶん賑わいそうだとあった。

そして伯母は終りの方に、半ば冗談めかして、第一おじさんと二人で、毎日、顔をつきあわせていてもおもしろくない、若い人がいた方が活気があっていいと書いてあった。

高志の母は手紙を見ていった。

「春代さんも、郁夫さんをなくして淋しいのだよ」

伯母は五年前に一粒種の、郁夫という息子を戦死させていたのである。

その頃、家庭教師先の一軒の家の生徒が、夏休みに里に帰るといふ予定がわかった。そこで高志はもう一軒の方に、夏休みを申し出て、伯母によりやく承諾の手紙を出したのだ。

右がわに小店の並んだ街道は、五十メートルと行かない

うちに切れて、右に曲がる道が線路を渡って海の方にむかっていた。

線路と海岸の間は、松林の中の別荘地である。伯母の家はその中の、もっとも海岸よりの一軒だった。

踏切を渡ってしばらく行くと、松林はすぐに深くなり、濃い日陰を作る。かすかな潮のにおいをふくむ海風も感じられる。高志は急にひんやりとしたものを、下着の下に感じた。いつのまにか体じゅうに汗をかいていたのだ。

大きな松の幹をまわって、絵日傘が二つ出て来た。和服の女が二人、傘とともに歩いてくる。絵日傘の鄙びた感じと、彼女たちの涼しげに白い着物とが、ふしぎによくあつた。

このいささか古風で、いささか少女小説じみた光景は、文学愛好者の高志の胸をはずませた。あれた都会の事物ばかりになれた彼の目に、さわやかであつた。

二人はすぐに高志の前に近づいた。彼女たちの白紵の上に、日傘の色がほのかに写っている。

白地に緑の秋草を大柄にあしらった日傘の女が、急に立ちどまった。藍色で流水をあらわしたらしい模様のうしろの日傘が、瞬間、ちよつと前の傘にもつれるようになって、同じようにとまった。

「芦川さんでは？ 高志さんでは？」

声をかけられた瞬間に、高志はそれが誰かすぐにわかった。戸張の家の美穂子であつた。伯母の手紙にあつた、今は進駐軍のハウスキーパーをしているという……。

美穂子は少しも変わっていないかつた。その美しさも、その年の感じも……。

八年前……美穂子はいくつであつたか……。子供の高志には正確なけんとうはつくはずもなかつた。だが、ともかくも年のわりには、ひどく成熟した美しさであることは理解していた。

母親も美しかつた。そして美しさの特権である若さにあふれていた。いや、事実、若かつたのかも知れない。

だからこの親娘は、まるで姉妹のような感じだつた。しかもその細身ながら強靱（きうじん）そうな体つきといい、優雅に長い首といい二人ともよく似ていた。

いま美穂子はそのままの若さで、こんどはすっかり成熟した妹の津枝子と、さして年の違いを感じさせなくなつていた。

津枝子は……高志より一歳半ばかり年上にすぎなかつただけに、あの時はさすがにまだ子供くさかつた。だがいまはすっかり娘になつている。

やはり母親ゆずりのしなやかな体つきであつた。首つきは母親や姉ほどではないが、同じように日本的な美しさが

あった。だが、顔つきにも体つきにも、全体に柔かい丸味がある。

高志は少女の時に見た津枝子の特徴は、すべて美しさの芽であることを、いま知った。柔かい丸顔、大きな目、濃い眉。……好ましいとは思いつながら、どこかアンバランスを感じないでもなかったその目鼻立ちは、すべて今のためのものだったのだ。しかしあの時の少女らしい無邪気さは、鼻もとから頬のあたりにじゅうぶん残している。

伯母から戸張の家が、進駐軍と関係していると聞いた時、高志は二人の姉妹の上に、好もしからぬイメージを感じないでもなかった。進駐軍の權威を笠に着たエリートぶりで、その品性をますます卑しく見せている種族である。

女にも男にも、そういう人種が横行している時代だった。進駐軍顧問をふりかざす蝶ネクタイの男、通訳ではなくてインタブレーターであると主張するドレスに原色が好きな女性、GIの恋人を持つことを最高のしあわせと得意に思っているオンリー、POWのプリント文字を背中にいただいた黄土色の服で、楽しげに基地のゲートを出入りする若者……。しかしじつさいのところ、衣食住の追求に疲れた日本人にとっては、そういう仕事につける人たちは、確かに羨望すべき人種でもあったのだが……。

しかし、戸張姉妹には、そんなものはひとかけらもなか

った。時の流れを越えて、深く静かに美しかった。

高志はルリタテハを感じた。少年時代のひと頃、昆虫採集に熱中した彼は、この蝶が成虫のまま冬を越して、早春に姿をあらわすのをよく見ていた。成虫で越冬する蝶は、ほかに数種類いる。だがふしぎにこの蝶だけは、翅に損傷が少なく、深い紺地に青色の帯と白点をすばやく見え隠れさせて、春の陽の中をジグザグに飛んで行く。

彼女たちの上にも、八年の歳月が流れている。しかも荒唐した時の流れが……。だが二人はいま美しくあった。

美穂子は高志が日傘の端に入るほどに近づいてきた。黒いひとみの輝きが、ふしぎなそよぎを見せていた。

「郁夫さんがむこうから歩いて来たかと思つたわ。ほんとに、そっくり。あなたの伯母様に、今日あたりいらつしゃると聞いていなかったら、びっくりして気が遠くなつたかも知れないわ……」

陽にあふられた日傘の布のにおいが、微かにただよう。ほりの深い造作の、彼女の高めめの鼻に、小さな汗の粒がきれいに浮かんではいるのを高志は一瞥した。何か見てはいけないものを見たように、高志は視線をうしろの津枝子にすべらせた。

津枝子は首を小さく前に出す軽い一礼をした。そのなじみ深げなようすは、ようやく高志の心をくつろがせた。ほ